

ナースリースクールで

サラ・ロー・ハモンド他



(註) フロリダ州立大学(所在地テラハシー市) 教育学教授サラ・ロー・ハモンド、同大学、家庭および家族生活学教授ルース・ダレス、マイアミ大学(フロリダ州、コラル・ゲイプルス所在) 教育学教授アルマ・W・デビッド、フロリダ州立大学付属校ルシー・ハリソン、フロリダ大学(ゲイネスビル所在) ビーケー・ヨーンジ学部ルシー・スルトン、バームビーチ郡立学校指導主事エドナ・バーカー、フロリダ州立大学校外指導教師ドラ・サイクス・スキップバー共著、「子どもたちのよい日」より

あなたは四歳児にむかって、「あなたはどのようにしてナースリースクールにいききたいの」と尋ねてみたことがあるか。

それに対する子どもの答は、「ここがおもしろいから」とか、「私はほんとに來たいんだ」とか、「遊ぶものがいろいろあるから」とか、「ボビーやジーンやその他の子どもたちと遊びたいから」など、さまざまであろう。この年齢の子どもたちには、自分がなぜナースリースクールを好むかという理由を十分に述べることは無理である。教師たちもまた三、四歳児にむかって、ナース

リースクールの目的や、そこでの「よい日」について、説明することは、困難であろう。それぞれの日は違うが、どのよい日にも子どもと親がよい日だと認める何かがある。

一般にナースリースクールは、大部分の子どもたちにとって、他の子どもと交わる最初の集団である。それを考えるとき、われわれは、そのような子どもたちがお互いにどんな反応をしあうかに注意しはじめる。三歳児が自分と同年齢の他のものと顔を合わせたときには、何が起こるだろうか。

彼はおもちゃをひったくったり、人形コーナーで赤ん坊になることに、おとなしく従ったり、他のものがブロックで家をたてるのをじっと見たりするだろう。彼は、家庭にはない新しいおもちゃや教具を、人に分けることはできないかもしれない。しかし指導によつては、他のものと分けあうということも、大した問題にならないですむであらう。

ドナはひとかたまりのドーフ粘土を小さくわつて、テーブルのひとりひとりの子どもに、ひとつずつ分け与えている。

W先生が「ドナちゃんはドーフ粘土を分けてあげているのね」という。

ドナが「わたしは分けているのよ」とくりかえす。

ある子どもたちは、分けるのには指導が必要なのだ。ジュリアはもつと多くの皿をほしがり、スウザンからそのいくつかを奪おうとしている。スウザンは彼女が洗っている皿をつかんで離さない。ジュリアは金切声をはりあげる。

W先生は「ジュリアちゃん、スウザンちゃんに、私にもお皿を少しわけてちょうだいと、たのみなさい」という。

ジュリアはいう。

「スウザンちゃん、わたしにも分けてちょうだい」

スウザンは、いく枚かのお皿をわたす。

W先生が「ありがとう」という。

ジュリアも「ありがとう」という。

ある三歳児たちは、内気で、引込み思案で、たとえば、自転車にのる順番がまわってくればと思っているのを、誰かにみてほしと願っている。

四歳児もまた、彼らが何時でも「まごこと」をしたり、グループの一員であることを、はっきり望んでいるわけではない。家では彼らは自分と同じ年齢の遊び相手を、だれももたないかもしれない。だからこれは実に、大きなグループの一員たることを学ぶ新しい経験である。彼らが兄弟や姉妹をもっていたら、みんなが同じ年齢であるナースリースクールで、リーダーや従者になることは、むずかしいかもしれない。

三歳児が母親から引き離されたときは、どうなるのだろうか。「お早うございます。わたしは学校にきたのよ」これはナンシーがナースリースクールの先生にした、あいさつである。いくつかの玩具を熱心にしらべて彼女は、「これ、これ、これ、これがほしいのよ」という。それから母親の方をふりむいて、

「私はいま学校にきているのよ」という。

母親は「今かえってまた五時にお迎えにきてもらいたい？」とたずねる。ナンシーはすぐに承知する。

ナンシーは画架を見ながらいう。「わたしはかきたくないの」と。

教師は母親が帰ってしまつて、状況が変わっていることを知って答える。「もし私がかき方を教えたら、あなたは、きっとそれが好きになるわよ」と。

ナンシーは承知し、やがて絵をかくことのおもしろさをおぼえる。なかば歌うようにいう。「わたしは自分でかいた。自分の指で。自分の指で」と。

うれしさいっぱいのナンシーでさえも、「先生があなたにかき方を教えてあげましょう」という援助のことばが必要であったのである。

ナースリースクールのよい日は、理解のある教師によって、子どもたちのひとりひとりに、グループの一員として活動する機会を提供する。

ナースリースクールの教師は、一日の流れの中に、子どもたちにとって新しい経験となるものがたくさんあることに気がつかなければならぬ。その中には家畜や愛玩動物もふくまれている。

マッシュウは籠の中の白の二十日鼠を見て、じっと考える。

「あ、動物がいるよ。二十日鼠だ。ぼく二十日鼠が大すき。一、二、三つて車をまわしてるよ。目をとじてるよ。これは小さな赤ん坊だ。あれは大きな丈夫な親鼠。赤ん坊とお母さん鼠とお父さん鼠」注意ぶかい観察―科学心の芽ばえ。

みつばちについての話をきいた後で、アンネは、つぎのように尋ねる。「みつばちの本を借りて、家にもつてかえてもいい。お母さんは蜜蜂の話を知らないもの」

音楽や芸術の経験の中に、創造活動がふくまれている。遠足では、いろいろなところへいく。農場にいたり、動物園や、消防署、あるいは飛行場などへ。ある日の遠足では近所を探検する。

この年齢の子どもたちは、衣服のぬぎき、排便、食事などいろいろな方面で自分でやろうと努力する。この場合、他の子どものやるのを見ることが、家で保護されすぎている子には励ましとなるであらう。

子どもにとっての「いい一日」というのは、偶然おこるのだろうか。そうではない。教師が前もって、学習を助成する環境を、注意ぶかく計画してつくっておくのである。教師自身が重要である。教師は、子どもたちが何を好むかを知り、かれらの可能性を理解できねばならない。教師は子どもの行動にたいする洞察力を

もち、子どもが好きでなければならぬ。教師は園の雑務をあまりもつてはならないが、しかし園全体のことにについてよく知っていなければならぬ。彼女は個々の子どもの特殊な要求をすばやく見ぬくことが要求される。

園の雰囲気は、すべての子どもが忙しく活動し、熱中しているが、外から統制されてはいない。ひとつの活動からもうひとつの活動へ、しっかりとした計画のもとに急ぐことなくスムーズに流れる。

子どもたちと教師の声が穏やかにひびいている。突発的なできごとともうまく受け入れられる。自然について発見したことは、原因と結果について、季節の変化もおりませて討論される。

両親はナースリースクールの生活について、しばしば多くの疑問をもっている。どうしてこうするのか、どうしてああするのかなど。教師との非公式な接触、電話での会話、観察、会議、印刷物、掲示板、手紙などが、その説明のためにつかわれる。たとえば、つぎの文は両親への手紙の抜粋である。

「外遊びは本来、砂遊びや泥遊び、水遊び、フィンガーペインティングや絵の具などをさせるものです。それでこれらの活動を活発にさせるために、お子さんたちに古着を着せることをすすめています。どうぞ趣旨にご賛同ください」

春の季節に関するナースリースクールでの活動について、両親に知らせる別の手紙もある。

——春のきざしの観察、それに関する詩や歌、湖へのした見、遠足を計画した理由、などが記されている。

子どもたちも、また、自分の歩みを評価する。最近五歳になった子どもたちのグループは、どんなに彼らが大きくなったかについて話していた。

「ぼくたち、背が高くなったよ」

「ぼくたちはふとったよ」

「わたしたちは、いろんなことができるようになったわ」
サムはいう。

「ぼくたちがはじめてナースリースクールにきたときは、自分の上着をロッカーにおいたんだよ。ぼくはいつも上着を掛けられなかったし、いつもぼくの玩具では、誰にも遊ばせなかったんだよ」

責任と自覚の発達を子ども自身がみとめている。

この年齢の子どもたちにとっての「よい日」というのは、楽しい日であり、広い世界の新しい経験の刺激に満ちている。そこでは子どもたちはたえず「なぜ、なぜ」という疑問をもっており、教師はそれに答えることをせまられているのである。